

中世父子別離邂逅譚の考察

——『藤の衣物語絵巻』を中心に——

山 田 千 咲

はじめに

中世期は、父権が高まる時代である。服藤早苗氏は、平安中期頃の貴族女性は、貴族男性と結婚し、同居の正妻として安定した生活を送ることを理想としていたとし、上層貴族女性は基本的に朝廷に出仕することはなかったと述べている。また、これにより父親の経済力でもって子を扶養することが一般的となり、家業の父子継承を背景に父の子への権限強化が始まったと指摘している¹⁾。このような中世期の父子関係の研究においては、おもに貴族の日記が題材として用いられてきた。文学作品も研究対象とされているが、多くは『栄花

物語』や『大鏡』などの歴史物語である。しかし、歴史物語に限らず文学作品には、書き手の生きた時代に当たり前のこととして存在した社会の姿が映し出されているはずである。そのため、広く文学作品を研究対象とすることは、中世家族史研究においても有効であると考ええる。

中世期の物語は、家父長的社会が成立したことによる影響を受けている。特に鎌倉時代に多く見られる親探しの物語では、母子の繋がりよりも家を象徴する父との繋がり重視している。そのため、子どもが別れた父親を探すことをテーマとする作品が多く生まれた。ここでは、このような作品群を中世父子別離邂逅譚と総称することとする。

中世父子別離邂逅譚においては、大抵の場合、両親が身分

違いの恋や不倫関係にあったと設定されている。そのため、生まれた子どもは父や母のことを知らぬまま成長する。このような物語について神田龍身氏は、多くの場合、子どもは母方で育ち、後に父方に帰属していると指摘し、子は父方で養育されるべきという時代状況から、あえて母方にいるという欠損状況をつくり出し、父方に帰属するまでを描く型が編み出されたとしている。また、始めから子が父方にいる場合の物語についても触れ、そのあらかたは父の悲恋遍世譚であり、父の失踪や死によつて親子間に距離を設けて物語を成立させているのだと指摘している²⁾。

本稿は『藤の衣物語絵巻』を中心に、中世父子別離邂逅譚に見える中世期の親子観について考察するものである。さらに中世期に成立した他の親探しの物語をとりあげ、別離した親子の描写のさまから、中世期を通じて親子観がどのように変わっているのかを考察し、中世における父子別離邂逅譚の展開に占める『藤の衣物語絵巻』の立ち位置を確認していく。

第一章 『遊女絵物語』から『藤の衣物語絵巻』へ

『藤の衣物語絵巻』は、後継者争いに巻き込まれ、失踪して山伏となった太政大臣の子息と、その三人の子どもたちの父探しの物語である。細見美術館蔵の一卷とアメリカのブルックリン美術館蔵の一卷、さらにアメリカのクリーヴランド美術館とフリア美術館にそれぞれ一図ある絵からなる。成立年代について伊東祐子氏は、詞書と画中詞とでは、国語史の観点からみて成立年代が異なっているとし、詞書は鎌倉時代、画中詞は室町時代の成立であると述べている³⁾。

ここまで『藤の衣物語絵巻』として述べてきたこの物語は、実は原題未詳の物語絵巻である。本絵巻を初めて紹介した権崎宗重氏は、「遊女の物語であることは、ほぼ推察できる。」として『遊女絵物語』と題した⁴⁾。しかし、その論文において翻刻や紹介がされたのは前半部（細見美術館蔵）の詞書のみで、後半部（ブルックリン美術館蔵）についての翻刻や紹介はされなかった。『遊女絵物語』という名称について伊東祐子氏は、細見美術館蔵の一卷とブルックリン美術館蔵の一卷

の詞書と画中詞を読んだうえで、「物語全体を反映する適切な題名とはいにくい。」とした。伊東氏は、「藤の衣」が山伏の象徴であり、父と子の物語の象徴であるとして、本絵巻の名称を『藤の衣物語絵巻』と命名した⁵⁾。本稿では、伊東氏に従い『藤の衣物語絵巻』の名称を用いることとする。

前半部は「若き人」（後の山伏）とあそびの出逢いと別れから始まり、女の子の誕生、あそびの死、女の子が太政大臣邸に引き取られるまでを描き、後半部では山伏が登場し、あそびの娘、太政大臣邸に残してきた若君、僧正の妹との間に産まれた荒験者という、山伏の三人の子どもの邂逅に始まる親子の絆の確認あるいはすれ違いが描かれている。

『藤の衣物語絵巻』の主題については、先述のように伊東氏は父と子の物語とみて『藤の衣物語絵巻』と命名した。はたして『藤の衣物語絵巻』は父と子の物語とみてよいのであろうか。前半部であそびの娘について描き、後半部では山伏と若君の様子が多く描かれていることから、一見すると父と娘を中心とした物語と、父と息子を中心とした物語の二つを繋ぎ合わせたもののようにも見えるが、『藤の衣物語絵巻』を一つの物語として貫くテーマが何であるかについての考察

が、本稿の主要な課題である。

第二章 『藤の衣物語絵巻』の主題は何か

『藤の衣物語絵巻』は前述したように、前半部はあそびの娘が誕生し父方に引き取られるまでを細かく描写しているため、父山伏とあそびの娘の物語であるとし、神田氏のいう、子が母方から「父方へ帰属するまでを描く型」の物語ととらえることができそうである。一方、後半部は山伏との偶然的再会后、またしても会えなくなってしまう山伏を想う若君の描写が多いため、父山伏と若君の物語であるとし、同じく神田氏のいう、「父の失踪」を主題とする物語と考えることができる。しかし、親子の伴についてのあそびの娘と若君それぞれ描写を詳細に検討してみると、このような見方には疑問が生じる。

第一節 あそびの娘と父

あそびの娘が父についての話を初めて耳にするのは、父方である太政大臣邸に引き取られることが決まり、使いの者が

迎えに来た際のことである。あそびの娘の美しさと、何より行方知れずとなった「若き人」の面影をはつきりと残したその姿を見て、使いの者は涙を流す。さらに、あそびの死後その娘を育ててきた長者が、これまでのあそびの娘の境遇と別れの寂しさを語り、こちらも涙を流す。このときあそびの娘の様子は、

君も目をすりて、ねぶたげにまぎらはし給へば、「御殿籠れ」など、尼君の膝にかき伏せられて、はかなく寝入り給ひぬ。

と描かれている。尼君とは、あそびの娘が引き取られるまでの数ヶ月間娘の側に仕えていた者で、嵯峨の入道太政大臣（太政大臣の父）に仕えていた過去がある。このときあそびの娘は十歳ほどである。年齢からして、自らの父の話であると理解することはできそうなものだが、父について興味を示すような描写はない。娘が涙を流していた理由も、長者の語りの後に娘が涙する様子が描かれているので、長者との別れの寂しさが理由であると推測できる。初めて父のことを耳に

する場面でありながら、あそびの娘が父に対して抱く想いを読み取ることはできない。たしかに、子が母方（長者）から「父方へ帰属するまでを描く型」の要素を満たしているが、物語はそこで完結しない。

あそびの娘と父山伏が出会うのはそれから四、五年のことである。娘が病を罹ったため、祖母宮の御方（「若き人」の母）は娘や若君などを連れて参籠していた。訪れた寺に偶然居合わせた二人の山伏のうちの一人が、娘や若君の父であり、祖母宮の御方の息子である失踪した「若き人」その人であった。娘の加持祈禱をこの山伏がすることになるが、このとき娘は伏せていたと描かれており、父の姿を目にした可能性は低い。

物語ではこの後に、あそびの娘と山伏が再び出会う描写はない。また、娘が父について語る描写も見られず、ようやく父への想いが見られるのは、父山伏が亡くなってのちのことである。若君に父山伏を探すよう命じられていたあこ丸という人物から、あそびの娘と若君は父が死んでしまったことを伝えられる。このときあそびの娘が、

夢かや、されば。いまだ世におはせば、いま一度とこそ
思ひ念じつれ。しくしく。

と言つて悲しむ姿が画中詞に描かれている。ここに到るまで
のあそびの娘の描写は、春宮の女御となり、二人の皇子と一
人の皇女を産み、中宮となつたということを簡単に描くのみ
である。このようなことから、あそびの娘が父を探す物語で
あるとは言い難い。

第二節 若君と父

では、『藤の衣物語絵巻』において父探しを行った人物は
誰か。それは若君であると考えられる。若君の母親は父「若
き人」の従姉妹にあたる女性である。深い仲となつた二人を
「若き人」の父太政大臣はよく思わず、その状況に二人は嘆
いていた。そんな折に生まれたのが若君である。しかし、状
況は好転せぬまま母が死亡、父も失踪し、一人残された若君
は祖母宮の御方のもとで育てられた。若君は、幼いころに父
と別れたため父の姿を覚えていない。そのため父との再会を
果たすも、父と気づかぬまま再び離れてしまうことになる。

若君と父山伏の再会は、あそびの娘と同じく参籠した寺での
ことである。父山伏に同行していたもう一人の山伏と宮の御
方の会話の場面で、若君は父と顔を合わすことになる。若君
は父山伏の姿を見て次のように思い、素性もわからない山伏
に親しみを感じている。

かく聞く人（もう一人の山伏）よりも、などやらん、行
方も知らぬ、あの山伏の、よにもものなつかしく、あはれ
におぼゆる。いかなる人ならん。かやうにて過ぐす人、
いかが心も澄むらん。うらやましや、など、案じあたり。

若君に父の記憶は無いながらも、親子の繋がりを感じさせ
る描写となつている。このとき山伏は、もう一人の山伏と宮
の御方の会話から目の前にいるのが息子若君であると知り、
一人前になつたその姿を感慨深く思うが、自ら名乗ることは
しない。この後、山伏があそびの娘の加持祈禱を行う場面と
なり、山伏や若君たちの前に物の怪が出現する。物の怪は山
伏に対し、泣きながら次のように語る。

した。

君をば、我、失ひてし人ぞかし。されど、それゆゑ、かく尊き人ともなり給ひぬれば、その結縁となりて、かくめぐりあひきこえて、読み給ふ御経の声をも聞きつるに、罪軽みて、仏道近くなりぬ。我が子を世にあらせんとせし心ざしに、はかりしことなれど、かかる心しあれば、

いかでかよくもあらん。はかばかしくもあらで、亡せにき。君の御末こそ、道理のままに栄え給ふべければ、この姫君も国の親ともなり給ふべければ、いとくちをしくてさまたげきこえんとしつれど、対面たまはりぬれば、恥づかしくて去ぬるなり。同じくは仏道なし果て給ひてよ。また、この御あたりへさらにまつでじ。

この物の怪の正体は、太政大臣の三人の妻のうちの一人、大臣殿の御方の死霊である。大臣殿の御方の子息は、若き人と同い年で、月違いの弟であつた。我が子を嫡子にという大臣殿の御方の思いから後継者争いが勃発し、これが原因で若き人は失踪し、山伏となつた。大臣殿の御方の思いどおりにその子息が嫡子となつて、三位中将にまで昇つたが、重い瘡を患つて死亡する。それに続くように大臣殿の御方も死亡

物の怪が泣きながら語つた内容に周囲の者たちはざわつきだす。太政大臣の家の者たちであるため、大臣殿の御方の策謀で後継者争いが起こつたことは知つていたと考えられる。

また、姫君（あそびの娘）と若君が若き人の子どもであることは、これ以前の場面で語られている。人々のなかに、あの山伏はいつたい誰だという疑問が湧く。画中詞では、「あの山伏は誰なのか」と問う宮の御方に対して、「あなたの息子だ」と物の怪が返している。当然ながら、宮の御方は山伏を一目見た時から我が子であると気付いていなかったのかという疑問が生じるが、物語はそのことには触れず、このように展開している。皆が夢を見ているかのような思いで呆然とするなか、詞書によれば、山伏は若君に「笛だつもの」を残して出て行つてしまった。このような出来事があつて、若君はあの山伏が自らの父であると感じ、父に思いを寄せる描写が見られるようになる。

これ以降、父山伏と会うことのなかつたあそびの娘とは違い、若君はもう一度父の姿を目にする機会がある。祖父太政大臣が亡くなり、供養のために高野山へ登り、奥の院に参詣

した若君は、その夜いつも以上に強く父に思いをはせていた。すると経を読む声が聞こえ、どこか親しみを感じる。声の人物が近くを通り過ぎるのを見ると、その雰囲気はまさしくかの山伏のものであった。急いで外に出た若君を見た山伏は、またしてもどこへともなく消えてしまふ。あこ丸に命じて父を探し続けていたが、結局これが父山伏を見た最後となつてしまふ。

父山伏に思いをはせるときの若君は、涙を流す姿で描かれる。それほどまでに、父と会うことを切望しているように考えられ、あそびの娘よりも強い思いを父に抱いていると読み取れる。あそびの娘と若君の、父山伏への思いが見られる描写に明らかに差があることから、全体を通して物語の中心人物は山伏と若君であると考えられる。

以上のことを前提に物語を振り返ってみると、あそびの娘を主人公として見えていた前半は、実は娘を見た人々が、失踪する前の若き人の思い出を語っている描写が多いことに気付かされる。ここからすると、前半はあそびの娘を紹介して、若き人がどのような人物であったのかを読み手に伝える役割を持って設定されていると考えられる。後半とのつな

がりを見ても、若き人の人物像を示したところで後半に入り、若き人（このときは山伏）の視点で始まるため、物語の流れがスムーズになる。さらに、後半であそびの娘の描写が減り、代わりに若君の描写が増えたことも、そもそもが山伏と若君の物語であるとするれば納得がいく。これらを踏まえて、『藤の衣物語絵巻』は父山伏と息子若君を中心とした物語であり、父方にいた子を残して父が失踪してしまふ型の物語であると考える。

第三節 荒験者と父

若君は物語の中心人物であり、あそびの娘は「若き人」の人物像を示す役割を持つならば、三人目の子荒験者はどのような役割を持っているのか。それは「山伏」の姿を伝える役割ではないかと考えられる。

山伏があそびの娘の加持祈禱を行った年の夏、帝が病にかかる。験者たちに祈禱させるも一向に良くならず、国中に不安が広がっていた。そこで阿闍梨から、最近修行を積んで出てきた荒験者がいるので試してみてもどうかと提案があり、荒験者を呼び寄せた。荒験者は加持祈禱によって帝の病を治

し、帝はその靈験の高さを評価して、荒験者に僧都の位を授けた。これが荒験者が初めて登場する場面である。

帝は荒験者の師である僧正を呼び寄せ、靈験が高いだけでなく、心づかいや立ち居振る舞いまでもが立派である荒験者は、一体誰の子なのかと質問する。これに対し僧正は、「はっきり申し上げることはできない」と前置きをして、荒験者の誕生について話し始めた。荒験者の父は、僧正が修行をしていた頃に出会った人で、出家の望みが強かったが、出家姿に変えがたく、どうにかこの世に思いとどまってくれないかと思ひ、妹と一緒に住まわせたが、跡形もなく消えてしまった。形見として荒験者が妹のもとに生まれ、自ら大事に育ててきたのである。ここでは僧正が前置きした通り、荒験者の父が誰であるかはわかっていない。「ともに暮らしていた間にどのような家柄の者が聞かなかったのか」との帝からの問いに、「届かせたいと思つて、しつこく尋ねることをしなかった」と僧正は答えた。しかし、この話を聞いていた女房たちが、僧都（荒験者）の容姿が中納言（若君）と似ていると話しており、荒験者の父が若君たちと同じく「若き人」であると匂わせる描写になっている。物語をすべて読むと、この場面が

荒験者の誕生が語られるとともに、父山伏が「若き人」から「山伏」になる直前の様子を伝えていることがわかる。

荒験者は、若君やあそびの娘と違い、父が山伏であることを知っていた。それは荒験者が幼いころに父山伏と再会していたからである。荒験者は幼いころ、天狗のようなものに連れ去られ山中に置き去りにされた。偶然出くわした山伏が加持祈禱を行ったところ、山王権現が現れ、二人が親子であることを伝えた。しかし、父山伏は荒験者を息子と知りながらも、同じ場所には留まらず、その後は修行中に偶然出会うのみであったと荒験者は語った。このようなことから、父が山伏であると知った荒験者だが、父の出家前の姿については何も知らなかったことが物語の最終場面でわかる。

物語の最終場面は若君と荒験者が父について語り合うというもので、ここで荒験者は若君に次のように語る。

まかりもむかひ候ふ。また、まさしく山王の御託候ひしうへは、かれもあらがひ所なく、あはれにも思はれて候ひしかども、誰といふことをうけたまはりひらき候はざりつるに、邪氣の申し候ひしことも、今こそ思ひあはせ

られ候へ。

「邪氣の申し候ひしこと」とは、これより前の場面、中宮（あそびの娘）が皇女を出産後、容態が悪化したため僧都（荒験者）が加持を行ったところに描かれている。僧都が加持をすると物の怪が現れる。物の怪は泣きながら次のように言う。

ながくこの御あたりにまうでじ、と聞こえしかど、昔、意趣深く思ひきこえし御末のみ、かくあやにくに栄え給ふを見るが心憂きに、ひまをつかがひつるなり。この后宮、中納言殿などこそあらめ、この僧都さへ、こと人によおはする。人こそ知らねど、同じ野のゆかりの草のみ、栄え給ふめれば、さるたびには、我をのみ、うたてありて人の言うなん、悪心のやむ世なきに、初瀬にて対面聞こえし人も、なほざりならずとぶらひ給へば、はるかに浮かみぬれど、いまだ折々の炎を、えさまさぬなん苦しきに、この御ゆかりにのみかく恥をかくよ。

この物の怪の正体は、父山伏があそびの娘の加持祈禱を行ったときに出てきた物の怪と同じ、大臣殿の御方の死霊であることが最初の文を見るとわかる。僧都は物の怪の言葉を不思議に思って聞いていたが、思い当たることがあり、驚き急いで物の怪を封じ込めた。この物の怪の言葉を荒験者は気になっていたと思われるが、これを追求しようとはしなかった。荒験者は父山伏の最期を看取っているが、若君と語り合う場面で、「邪氣の申し候ひしことも、今こそ思ひあはせられ候へ。」と言っているため、最後まで父に直接素性を聞くことはしなかったのだと読み取れる。

父山伏と再会するもすぐに別れ、物の怪の言葉は追求せず、「若き人」の情報を得る機会を荒験者はすべて逃している。荒験者に「若き人」の情報を入れず、「若き人」について知る若君やあそびの娘と違いを持たせることで、荒験者を「山伏」の情報を持つものに位置づけようと意図していると考えられる。

小括 『藤の衣物語絵巻』は、若君による父探しの物語であり、「父の失踪」を主題とした物語であると考えられる。

それは三人の子の役割と物の怪の存在によるところが大きい。三人の子がそれぞれに父の姿を伝える役割を担っていることは、すでに考察した通りであるが、そもそも物語の主軸である父探しのきっかけをつくったのは物の怪である。父のことを覚えていない若君は、物の怪の言葉から山伏が父であると知るまで、父に思いをはせる姿は見られない。物の怪によって山伏が父だと知ることがなければ、若君が父探しを行うことはなかったと考えられる。また、二度目に物の怪が登場するときは、荒験者に若君やあそびの娘と父が同じであることを伝えている。思うことがあつた荒験者はすぐに物の怪を封じ、修行に出ていってしまう。しかし、ここで荒験者が修行に出ていなければ、父山伏の最期を看取することはできない。そうなれば、父の最後を知る者がいなくなり、物語として終わりがみえなくなってしまうと考えられる。このことから、物の怪の存在は、物語の展開を握る重要な要素であると理解することができる。

三人の子それぞれに役割を持たせ、物の怪によって物語を展開させることで、「若き人」と「山伏」の二つの情報が揃い、父の存在感を読み手に印象づけ、父の人生があつてこそ

三人の子の栄達があるのだということとを、『藤の衣物語絵巻』は強く押し出す構成となっていると察せられる。

第三章 中世期の親子観

中世期の物語は、家父長的社会の影響を受けている。『藤の衣物語絵巻』では、父があつてこそ子の栄達があるのだという父の存在の大きさを確認することができた。しかし、父の存在感や絶対性は、同じ中世期においても物語の成立した時代ごとで違いがみられる。物語にみえる家父長的意識は時代ごとにどのような変化を遂げたのか。以下に、平安時代後期に成立した『高藤内大臣語第七』（『今昔物語集』）から、鎌倉時代成立の『住吉物語』と『零ににころ』、最後に室町時代成立の『小敦盛』（御伽草子）を取り上げ、各物語の親子の別離や再会の描写から、時代ごとの親子観についての考察に視点をおきつつ、順次検討を加える。

第一節 「高藤内大臣語第七」（『今昔物語集』）

『今昔物語集』巻二十二「高藤内大臣語第七」は恋愛色の

強い物語であるが、離れていた父と娘が対面する場面が描かれている。高藤が十五、六歳のころ、鷹狩りに出かけると、急に雨が降り、風が強く、雷も鳴っていたため、馬を走らせ近くの家で雨宿りをする事になった。家主の男に案内され中に入ると、年のころ十三、四くらい美しい女(家主の娘)がいた。夜もふけて寝ようとしたが、その女が気になって仕方がないので、「二人で寝るのは心もとない」といつて女を呼びよせ、二人は契りを交わした。朝になって出立のときを迎えると、高藤は女に太刀を渡し、

此れを形見に置きたれ、祖、心浅くして男などと合すとも、
 努々人に見する事なせそ

と言ひ残して出立した。京の家に帰ると、心配した父親によつて鷹狩りなどの出歩きを禁じられ、女に会いに行くことができなくなつてしまった。長い年月を経て、ようやく女の家を訪ねると、家主の男は泣きたくなるほどに喜んで高藤を迎える。家に入ると、以前より少し背丈が伸び、さらに美しくなつた女がいた。女の傍には五、六歳ほどの女の子がいる。ここ

から父と娘の出会いの場面が描かれる。その記述は次の通りである。

「此れは誰ぞ」と問給へば、女うつふして泣くにや有らむと見ゆ、墓々しく答ふる事も无ければ、心も不得で、父の男を呼べば出来て、前に平がり居たり。君の言はく、「此の有る児は誰ぞ」と。父答て云く、「一とせ御ましたりに、其の後、人の當りに罷寄る事も不候す。本よりも幼く候し者なれば、人の當りに寄る事も不候ざりに、御まして候ひし程より懐任し候て、産て候ふになむ」と。此れを聞くに、極て哀れに悲くて、枕上の方を見れば、置し大刀有り。然ば、「此く深き契も有けり」と思ふに、弥よ哀に悲き事无限し。此の女子を見れば、我が形に似たる事、露許も不違ず。

高藤の娘は、このあと母と共に高藤のもとに引き取られる。高藤が出世し大納言になると、娘は宇多院の女御となり、その後、醍醐天皇の母となつた。

この物語の高藤の娘の境遇は、『藤の衣物語絵巻』のあそ

びの娘の境遇とよく似ている。成立年代が『高藤内大臣語第七』のほつが早いこともあり、この物語を踏まえて『藤の衣物語絵巻』が作り出された可能性もあるとされている。⁶⁾

『藤の衣物語絵巻』との違いをあげるとすれば、母が存命であるということである。『藤の衣物語絵巻』では、三人の子の母は全員早くに亡くなっている。しかし、高藤の娘の母は自ら娘を育て、高藤との再会后、二人の男子を産んでいる。『今昔物語集』が成立した平安後期は、鎌倉時代ほど女性の力は弱まっておらず、物語でも子どもの成長においては父と母の力の差は感じられない。しかし、二人の男子を産んでいることから、家を存続させるために跡継ぎを産むという「家」に入った女性の役割が、すでに人々の意識のなかにあったと考えられる。また、高藤が太刀を渡した際に、他の男に会わないように残していることから、女性への貞操観の強制が見られる。よってこの物語から、女性は母としての力はあるものの、妻としては夫に従属する状態であつたことが考えられる。

第二節 『住吉物語』

『住吉物語』は継子いじめの物語といわれる作品である。継子いじめの物語は、十世紀末に成立した『落窪物語』が現存最古であるとされ、ほかに『小夜衣』や『秋月物語』などが挙げられる。『住吉物語』の原作は、十世紀末に成立したとされるが残っておらず、改作された現存本は十三世紀中頃のものであるとされている。⁷⁾

この物語にも、父と娘の再会が描かれている。中納言兼左衛門督である人には、二人の妻がいた。そのうちの一人は、古い帝の娘で、女の子が生まれた。この姫君が八歳のとき、母は病に罹り死んでしまい、姫君は中納言邸に引き取られた。ここから、中納言のもう一人の妻による継子いじめが始まることになる。つらい日々を送る姫君は、人知れず京を離れる決意をし、父中納言にすら何も伝えぬまま離れてしまった。時が経ち、姫君に思いを寄せていた四位の少将が、住吉にいた姫君を見つけると、二人は結ばれともに帰京する。しかし中納言一家に知らせず、二人の子どもが七歳と五歳になったときに、そのお祝いとして中納言を招待した。受け取った引き出物が、かつて姫君が幼かったころに、はじめて着せ

た桂であると気づいた中納言（このときは大納言）が少将の元へ行き、そこで父と娘が再会を果たすことになる。その様子は、

姫君・侍従、母屋の御簾の内より急ぎ出でて、涙にくれて物をだに言ひ給はねば、大納言見給ひて、心も消えかへり、「こはいかに」とてあきれ給ひぬ。

と描かれている。この後、すべての事実を知った中納言は、継母と別居をし、その継母は自らの子をはじめ、すべての人々に嫌われ没落した。継母の実子は、実母のしたことを知り泣いてばかりいたが、幼い頃から姫君と親しかったため、姫君のもとへ迎えられた。この後、少将は閑白となり、少将と姫君の娘は女御になるなど、一族は繁栄した。

継子いじめの物語の始まりが十世紀末であるとすると、ちょうど父権の高まりが見え始めたころと重なる。「家」のなかで過ごすようになった女性たちが、力を發揮できるのは母としての役割である。重要なのは跡継ぎとなる男子を産むことであるが、『住吉物語』においては、中納言の二人の妻のど

ちらも男子は産んでいない。そうになると、いかに自身の娘を高位の男性と結婚させることができるかが力の人れどころとなる。姫君の母は亡くなる前に、中納言に対して次のように語っている。

「われ、はかなくなりなむのち、この姫君のことあわれなれ。なからむ跡なりとも、なみなみならむ有様させ給ふなよ。いかにもいかにも、内裏へ奉り給へ。あの姫たち（もう一人の妻の娘たち）におぼし劣らすなよ」

もう一人の妻とその娘たちのことを出すあたりに、強く意識し、負けてはならないという対抗心を持っていたことがうかがえる。しかし、それはもう一人の妻も同様である。美しく育った姫君に、右大臣の子息である四位の少将が手紙を送っているのと知ると、少将の手紙を自身の娘である三の君に渡し、返事を書かせた。少将も三の君も騙されていると知らないまま手紙のやりとりを続け、ついに通うようになってしまう。母を早くに亡くしているも子が美しく立派に育っていることから、子の成長に母の存在がそれほど重視されていないこ

とがわかる。しかし、母にとつては子の存在とその行く末が非常に重要であつたと考えられる。それは母の愛とも呼べるかもしれないが、嫉妬や対抗心が入り交じり、ただ純粋に子を想つての行動であるとは言い難い。

第三節 『零にこころ』

鎌倉時代に成立したとされる『零にこころ』は、前半部が脱落し、錯簡がみられるなど、内容のわからない部分の多い物語である。しかし、現在残された部分に父と息子の別離の描写がみられるためここに取り上げておきたい。

中納言は自分のことが原因で、内侍督が帝から離縁されて実家に戻つたことを悩んでいた。内侍督は実家で若宮を出産し、若宮は内裏に引き取られることを嬉しく感じるとともに、若宮に会うことができなくなる悲しさを感じていた。生き長らえる気持ちのない内侍督は、薬も飲まなくなり、ほどなくして亡くなる。内侍督への思いを断ち切れていなかった帝は、内侍督が亡くなったという知らせを聞くと臥してしまふ。内侍督の兄である宰相の中將は、山の麓で火葬しようとするが、この世に未練があるようではなかなか燃え尽きない。これを聞

いた帝は内侍督へ手紙を書き、さらに、内侍督を后宮にするとの宣旨を授けた。帝の手紙を煙の中に入れると、内侍督は天に昇つた。帝は、つらく儂いこの世を捨てて出家しようと考え、中宮との間に生まれた姫宮に、若宮を子どもとして世話してほしいと依頼した。年が経ち、帝は二歳になつた若宮を春宮に据え、宰相の中將の官位を少しづつ上げて内大臣にした。讓位して出家する決意を内大臣に伝えた帝は、春宮に讓位し、内大臣に帝が幼いうちは一品の宮（姫宮）と相談して後見するよう依頼した。出家後、院は人に姿を見せず、経をよんでいたが、しばらくして経を読む院の声が遠くなり、遺体も残さずに即身成仏してしまつた。一品の宮や女院（中宮）は、帝を見ると院の面影を思い出し、よりいっそう大事に育てた。

この物語は、帝や中納言が内侍督を思う気持ちが多く描かれており、子の親探しの描写はない。そのため、親子の絆を中心とした物語ではなく、「高藤内大臣語第七」と同じく恋愛色が強い物語であるといえる。前述した『住吉物語』の現存本と同時代ごろの成立であると思われるこの物語は、『住吉物語』と同じく母を早くに亡くした子が登場する。しかし、

『事ににこる』では、残された子に対する継母からのいじめがない。それどころか、継母である中宮には、大事に育てていこうという意識がみられる。では、何が継母の態度の違いを生むのか。それは息子が娘かの違いにあると考える。残された子の性別は、『住吉物語』では女子で、『事ににこる』では男子である。『住吉物語』のところで述べたように、母にとつて重要なのは跡継ぎとなる男子を産むことであり、それは「家」を存続させるためである。『住吉物語』では、男子がおらず、女子ばかりであつたため、自身の娘をより良くしようとして継子いじめが行われた。しかし、『事ににこる』では、残された子は男子で、中宮が産んだ子は女子である。男子が生まれている時点でいじめの理由がなく、むしろ継子であろうとも「家」を継ぐ存在であり、かつ次の帝となる子であるならば、大事にする以外なかつたのではと考えられる。このように考えると、いかに「家」の存続が重要視されていたかがわかり、また、「家」の主は男であるという考えが強い固なものであることがわかる。

第四節 『小敦盛』（御伽草子）

御伽草子の『小敦盛』という物語では、他の物語と違い、母と息子の再会が描かれている。一の谷の合戦で討たれた平敦盛の北の方は、生まれた若君が源氏方に見つかつては危険と思ひ、泣く泣く一乗寺下り松に捨てた。そのとき、たまたま通りかかつた法然上人が若君を見つけ、法然上人のもとで育てられることになる。八歳となつた若君が同じころの子どもたちと遊んでいると、ある稚児に、

父母もなき孤児がわれわれに向ひて口をきくことよ。上人取り上げさせ給ひてこそ、かくはあれ

と言われ、そこから若君は父母がいないことを嘆くようになる。見かねた法然上人が、説法を催し、若君のことを語ると、以前から説法の聴聞に来ていた女が名乗り出る。この女こそ若君の母・北の方である。

さるほどに、その聴聞の中よりも、十二単に袴着たる女房の、容顔美麗なるがでて給ひて、物をは何ともたまた

はで、かのをさあいを膝にかき寄せ、はらはらと泣き給ふ。いたはしやな、この若君、容顔いつくしくましまししが、御嘆きにやつれ給ひ、御目のうちも衰へはて給ひたるにて、この上臈を見給ひて、たがひに声も惜しませず泣き給つ。上人もこれを御覽して、椅子よりこぼれ落ち、落涙し給ふぞあはれなる。聴聞の人々も袖を濡らさぬはなかりけり。

このようにして母との再会を果たした若君であるが、ここで物語は終わらない。親子の再会を描いた物語は、一般に再会を果たした後、その一族が栄達をつかんだことを示して結びとなる。しかしこの「小敦盛」では、母との再会后、父を思つて嘆く若君が描かれる。若君は、

願はくは、父御の御遺骨になりとも、または御面影をなりとも、見させ給へ

と言ひ、賀茂の明神に祈願する。そのとき夢想があり、生田の小野へと向かった。若君がどうしていいかわからず途方に

くれていると、御堂の縁側を歩く人がいる。これが父・敦盛の亡霊である。目の前にいるのが父とは知らない若君が、父は敦盛であると語ると、我が子であると思つた敦盛の亡霊は涙を流す。御堂に若君を引き入れると、膝を枕にして若君を寝かせた。夢のなかで若君を慰めると、

恋ひ恋ひてまれに逢ふ夜も夢なれや

現に帰る身にしあらねは

と書き置く。若君は父に会えたことを喜んで、袖をつかもうとしたが、夢が覚めてしまい、辺りを見回しても父の姿はなかつた。膝だと思ひ枕にしていた場所には、膝の骨が苔の付いた状態で草むらに埋もれていた。悲しみ泣きながら敦盛の遺骨を持って帰つた若君は、このうち母とともに出家し、物語は終わりとなる。

父の亡霊に会つてから、自らの今後の人生を決めているため、この物語で重視されるのは、母と息子の再会ではなく、亡霊の父と息子の出会いだと考えられる。父敦盛は既に亡くなっているにも関わらず、亡霊というかたちでもつて若君と

の出会いを可能にしており、母だけでは子の行く末を決めるには足りないのだと考える。子の人生のなかで父の存在がどれほど大きいのかを示した物語であるといえる。さらに、母との再会と父の亡霊との出会いの両方を描くことで、より子に対する父母の力の差を明確に表していると考ええる。また、親子の再会を描いた物語は再会後に一族が栄達をつかむことが一般であったが、若君は出家の道を選んだ。これは、偉大な父がもはや存在しないのだということを、夢で会ったことよって実感したために、このような選択をしたと解することができる。

おわりに

ここまで、『藤の衣物語絵巻』を中心に、『高藤内大臣語第七』、『住吉物語』、『零ににころ』、『小敦盛』の親子の別離と再会についてみてきた。

平安末期の成立とされる『今昔物語集』の「高藤内大臣語第七」では、父も母も生きており、鎌倉時代ほど父母の力に差がなかったと考えられる。しかし、女性への貞操観の強制

は見られ、少しずつ父権が強まっていると思われる。

『藤の衣物語絵巻』では、山伏の三人の子どもたちが少しずつ栄達を掴み、一族が高みへとほる様子が見られる。また、父山伏と三人の子のなかでも若君との強い繋がりを描き、跡継ぎの男子であるが故の特別な存在感を示しているとも考えられる。

『藤の衣物語絵巻』と同時代の成立である『住吉物語』と『零ににころ』は、『藤の衣物語絵巻』と同じく母を早くに亡くした子が描かれ、子の成長における母の存在は重視されていない。また、残された子が女子である『住吉物語』では継子いじめがあり、男子である『零ににころ』では大事に育てられていることから、ここにおいても「家」の継承者である男子であるが故の存在感がうかがえる。

そして、室町時代に成立した御伽草子の『小敦盛』は、母と息子の再会も描いているが、序章に過ぎず、本当に伝えたことは父の亡霊と出会う場面に込められていると考える。父の亡霊と出会うことで子の人生が決まったことから、子にとって重要なのは父の存在であるのだと示し、父母の子への影響力の差を明確なものとしている。

このように時代を追って順に物語における親子関係を見ていくと、少しずつ家父長的意識が強まっていることがわかる。特に鎌倉時代以降、家父長的意識は子どもと父母に対する想いの差によって表されている。物語の中の子どもたちは、母がいなくとも立派に育ち、母がいなくことを嘆きふさぎ込んだりすることがない。しかし、父がいなくと会いたいと願い、父を想って泣く様子が多くみられる。それは、父が「家」の主であり、子どもたちがいるべき「家」を示す人物であるからと考える。このような父親の絶対的な力は、婚姻形態が妻問婚から嫁取婚へと変化したことで「家」意識が確立し、父に対する妻と子の従属がみられるようになり生まれたものである。

最後に再度『藤の衣物語絵巻』に立ち帰って、この物語における笛についての考察を述べて稿を終えることとしたい。詞書に記された、父山伏から若君へ送られた「笛だつもの」の「だつ」は、そのような状態になることを意味する言葉であるため、「笛（のよつ）になるもの」という表現となっている。⁸ そもそも何故、笛を子に渡すという場面で笛と断定

せず、このようなぼかした表現が用いられたのか。「笛だつもの」に関しては、詞書のうちには他に記述がみられない。詞書の成った鎌倉時代においては、この物語において「笛だつもの」は、父とは知ることのない若君を、父たる山伏へと引き寄せていくことになるものという、メタファーとしての役割を以て登場していると理解されよう。

ところが、対応する詞書が存在しない絵の画中詞のうちには、いくつかに「笛だつもの」に関する記述が認められる。

ブルックリン美術館蔵本の絵では、尼のような人物と女性が笛の音を聞き、近くにいた山伏に誰が吹いたのかと尋ねる場面がある。しかし、ここで笛の主が明かされることはない。伊東氏は、女性が山伏に親しみを覚え、山伏もまた女性に対し、「おのづから見し人にてやあるらん、と思へど、さして誰ともおぼえず。」（画中詞）と感じているさまから、この絵の女性と山伏は、あそびの娘と父山伏ではないかと考察している。さらに同館蔵本には別に、山の中の建物で二人の女性が偶然耳にした笛の音について話している絵があり、これら二つの絵で笛を吹いたのは父山伏ではないかとし、若君に渡した笛が父山伏の愛用品であるとわかる絵だと述べている。⁹

笛を吹いたのが父山伏であるとすれば、若君に渡す前になるため、物語の前半部と後半部の間に位置する絵ということになる。

細見美術館蔵本の絵にも笛の描写がある。それは祖母宮の御方の父の法事の場面である。画中詞によると、別室で若君が叔父に、行方知れずの父と思われる人に会ったと語る。叔父がどうしてそう思ったのかと問うと、若君は「蟬丸」を私にくれたからだと答えている。「蟬丸」という笛の名はこの場面の画中詞で唐突に登場し、父が「蟬丸」という笛を持っていたことを、なぜ若君が知っているのかなど様々な疑問が生じる。この絵には、あそびの娘が産んだ宮たちが描かれている。また画中詞によれば、父と思われる山伏に会って以来、父のことが心から離れないと語る若君の姿があつて、若君の父山伏への想いが強くなっているさまが描かれている。これらからすると、祖父太政大臣の供養で高野山に登つたおりに、奥の院で父を想つて泣く段の前に位置する絵であると考えられる。ここにおいて父山伏から授けられたメタファーとしての「笛だつもの」は、「蟬丸」という固有名詞を与えられ、父である山伏と若君を結び確かな紐帯へと変している。

笛の描写を物語の展開に沿って並べると、笛を吹いたのが山伏らしいという暗示から、「笛だつもの」の授与、そして父の愛用していた「蟬丸」であるという確信へと進んでいく。「笛だつもの」が、次第に父が与えた笛であることの確信へと変わり、「蟬丸」というくつきりとした姿となつて現れるという展開である。これらの笛の描写は、「笛だつもの」を授ける場面のみが鎌倉時代に成立した詞書にあり、そのほかは室町時代に成立した画中詞にある。

詞書の「笛だつもの」のみでは笛が父のものであつたという確信には至らない。若君と父山伏の関係性がいまだ曖昧な場面で「笛だつもの」とぼかした表現をしておき、このあとの物語の展開における、山伏が父であることを暗示するもの（伏線）として描かれたのだと理解できる。事実、若君が笛を受け取ってから父のことを意識するようになっていくことから、若君と父の存在を引き寄せる笛になるという役割を与えているように思われる。そして、詞書段階においては、いまだこのように暗示的で曖昧であつたものを、確信へと変え、笛が繋ぐ父と息子の絆の物語へと展開すべく、室町時代になって、笛にかかわる叙述が画中詞として書き加えられた

と考えられる。「笛だつもの物語」の完結である。⁽¹⁰⁾

室町時代成立の『小敦盛』においては、父の亡霊が子の将来を決定した。『藤の衣物語絵巻』においては、父は存命であるものの物語の最後においても子から遠ざかり、「蟬丸」を託すことよつて若君らの栄達を保証するという形が、『小敦盛』と同じく室町期に完成している。父の存在によつて、前者は出家、後者は貴族社会での栄達と、その結果は大きく異なるが、物語最後の場面においてあえて父を欠失させた設定によつて、かえつて父の絶対性を印象づけるという構図が両者に共通している。その意味で『藤の衣物語絵巻』における笛「蟬丸」は、室町時代における絶対的父権の「形見」としてとらえられよう。

注

- (1) 服藤早苗『平安朝の父と子 貴族と庶民の家と養育』(中央公論新社 二〇一〇年)による。
- (2) 神田龍身『鎌倉時代物語論序説 仮装、もしくは父子の物語』(『日本文学』三十五卷十二号 53~70頁、一九八六年十二月)による。
- (3) 伊東祐子『藤の衣物語絵巻(遊女物語絵巻)』影印・翻刻・

研究』(笠間書院、一九九六年)による。

- (4) 榎崎宗重『新出・遊女絵物語』と白描挿絵について』(『國華』八二一号、朝日新聞社、一九六〇年八月)による。
- (5) 伊東前注(3)『書ならびに伊東祐子』(『中世王物語全集』二二 物語絵巻集(笠間書院、二〇一九年)による。
- (6) 伊東前注(5)『書』
- (7) 室城秀之、桑原博史『中世王朝物語全集』十一 零に『住吉物語』(笠間書院、一九九五年)による。
- (8) 名詞や形容詞・形容動詞の語幹、その他の語に付いて、そのような様子を帯びる、そのような状態が現われる意を表わす。(『日本国語大辞典 第八巻 第二版』小学館、二〇〇一年)。
- (9) 伊東前注(5)『書』
- (10) 『源氏物語』横笛巻では、夕霧の夢枕に亡くなった柏木が現われ、自分の笛を自らの子孫に伝えたいと願う場面がある。これをきっかけに柏木と、光源氏の子とされていた薫との血縁が明らかとなる。成長した薫が吹く笛の音色は、柏木ら藤原氏の吹く音に似ていると言われ、笛の存在とその音によつて父子関係が証明されるという展開になっている。笛が父子関係を顕現していくという、共通のモチーフを見ることができ。

史料典拠一覧

伊東祐子『中世王朝物語全集』二二 物語絵巻集(笠間書院、二

〇一九年

松尾拾『今昔物語集読解二 卷二十、二十一、二十三』笠間書院、一九九四年

松本隆信『新潮日本古典集成 御伽草子集』新潮社、一九八〇年

室城秀之、桑原博史『中世王朝物語全集十一 零ににこる 住吉物語』笠間書院、一九九五年

参考文献一覽

辞典

『日本国語大辞典 第八卷 第二版』小学館、二〇〇一年

著書・研究論文

池田恭子『継子物語研究 継子物語の誕生に関する一仮説』

『日本文学』四十卷、一九七三年十一月

岩田真由子『日本古代の親子関係 孝養・相続・追善』八木書店、二〇二〇年

伊東祐子『遊女物語絵巻』試論 復原とその全体像』学習院大学文学部研究年報、三十七号、一九九一年三月

伊東祐子『藤の衣物語絵巻(遊女物語絵巻)』影印・翻刻・研究』笠間書院、一九九六年

伊東祐子『中世王朝物語全集二十一 物語絵巻集』笠間書院、二〇一九年

神田龍身『鎌倉時代物語論序説 仮装、もしくは父子の物語』

『日本文学』三十五卷十二号、53〜70頁、一九八六年十二月

北島優子『零に濁る』の結末…「めでたし」をめくって』『日本

文芸論叢』二十四号、48〜65頁、二〇一五年三月

榑崎宗重『新出『遊女絵物語』と白描挿絵について』『國華』八二二号、朝日新聞社、一九六〇年八月

服藤早苗『平安朝の母と子 貴族と庶民の家族生活史』中央公論社、一九九一年

服藤早苗『平安朝の父と子 貴族と庶民の家と養育』中央公論新社、二〇一〇年

室城秀之、桑原博史『中世王朝物語全集十一 零ににこる 住吉物語』笠間書院、一九九五年

山本夏希『源氏物語』『陽成院の御笛』考 准抛とのもたらすもの』『國學院雑誌』百十六卷九号、二〇一五年九月

脇田晴子『日本中世女性史の研究 性別役割分担と母性・家政・性愛』東京大学出版会、一九九二年

渡邊桂子『継子譚としてみた『落窪物語』の特質』『住吉物語』・『小夜衣』・『秋月物語』との比較から』『椋山国文学』二十六号、二〇〇二年三月